



JIC インフォメーション

第 187 号 2016 年 4 月 10 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

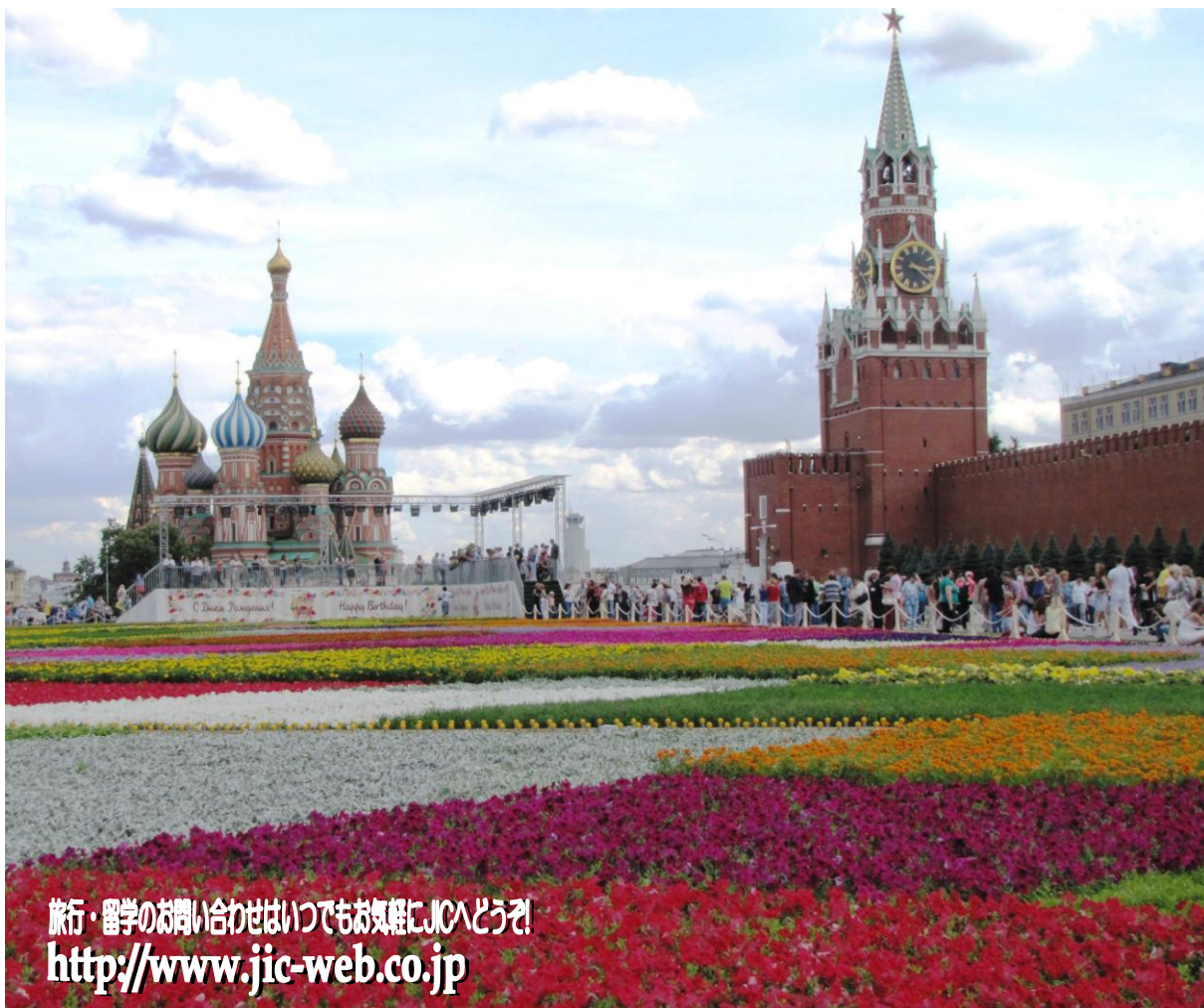
東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェニー



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



— モスクワ、赤の広場に出現したお花畑 —
(撮影: 下川原弘志氏・日口協会岩手県支部)

《特集》 JIC ロシアセミナー

「留学」が変えた人生

中澤英彦 (東京外国語大学名誉教授) 2P

<本の紹介>

プーチンとG8の終焉 (佐藤親賢著) 9P

50 歳からの海外留学のすすめ (加藤美知世著) . . . 10P

【知られざる日露の歴史】

遥かなる「浦潮斯徳」日本人街を語る 11P

カムチャツカ・アバチャ山 登山記(3)

白井 秀治 12P

【イベント情報】ロシア文化フェスティバル 2016 . . . 15P

日口愛知の会設立 15 周年 16P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

昨年 11 月 28 日、東京にて JIC ロシアセミナーおよびロシア語留学説明・相談会を開催しました。セミナーでは、東京外国語大学名誉教授の中澤英彦先生に「『留学』が変えた人生」というテーマで講演していただきました。

「ロシアは巨大な“大化け装置”」、「ロシア語はその人の才能を開花させる」。中澤先生のお話はとても面白く、これからロシアを目指そうという人たちを励ましてくれるものでした。以下は、その講演録です。(編集部)



JICロシアセミナー報告

「留学」が変えた人生

中澤 英彦・東京外国語大学名誉教授

今日参加の皆さんは、ロシア留学を考えている方が多いと思うのですが、「僕はあの国に留学して本当に遅くなり、世界が広くなりました」。これが今日、私がお話しすることの主眼です。

I. 大黒屋光太夫

「留学」第一号（留学の祖形）

見出しの留学に「」がついてますが、日本人のロシア「留学」第一号が大黒屋光太夫です。

「なんだ、江戸時代に漂流した人じゃないか」、「漂流学を勧めるのか?」と心配する方もいるかもしれませんが、決して今どき、「漂流しろ」なんて言うわけではありません(笑)。まずはここで、井上靖の長編小説を原作に製作された映画『おろしや国酔夢譚』(1992 年公開、佐藤純彌監督、緒方拳主演)を少し見ていただきます。これはまれに見るほど感動的な作品です。

……(事務局が DVD 上映操作に手間取る)……

機械の操作がうまくいきませんが、これも今日のテーマに即しているのかなと思います。ロシアに行くと、何ごとにつけ予定通りにいくことはまずありません。私が大学の在外研究でロシアへ行ったのは、大黒屋光太夫がロシアに漂流してから約 200 年後です。200 年も経っているわけですが、私が行ったときの体験、感想は、ほとんど光太夫と同じなのです。そこから留学の原型が光太夫にあるのではないかと思うに至りました。これが、上の光太夫は留学第一号という表現です。

あらすじを少し紹介します。光太夫は、1782 年(天明 2 年)12 月に現在の三重県の白子浦を廻船・神昌丸で出帆して江戸に向かいました。ところが遠州灘で嵐に遭い、8 か月間漂流して、アリューシャン列島(当時ロシア領)まで流されま

した。その後、光太夫らはカムチャツカに渡って、はるばるロシアの首都サント・ペテルブルグ(以後ペテルブルグ)まで行き、女帝エカテリーナに嘆願して帰国許可をもらい、約 9 年半ぶりに念願かなって日本に帰国しました。それまで漂流民でロシアから帰還した人は皆無でした。

これを江戸時代の瓦版の見出し風に言えば、「船頭、光太夫帰還! 九年ぶり。鉄の女帝の目にも涙」、という感じになるかと思います。

絶望的状况の中で必死に言葉を覚えた

光太夫の身分は百姓です。そうです、単なる一介の百姓。そういう人がロシアのあの巨大な帝国の、女帝エカテリーナの政策を変えてしまったのです。江戸時代にロシアに漂着した人は、全貌はまだ解明されていませんが、今の宇宙飛行士の数くらいいました。でも、誰も日本へ帰国できませんでした。時代は江戸後期。「鎖国」、「キリスト教御法度」の世です。光太夫は、当時としては一流の知識人だったものの、ロシアに関しては「オロシヤ」という名前を知っているくらいで、西欧語の知識は皆無でした。そもそも外国というのがどんなものか知らない。まさに絶望的状况です。言ってみれば現代人がアンドロメダ銀河に漂着したようなものです。

光太夫たちはアリューシャン列島のアムチカ島に辿りつき、そこにいるロシア人と意思疎通を図るために、何はともあれ言葉を知らなければならない。「言葉を知りたい」、「なんとか言葉を」、ということで苦闘します。では、その場面を少し見てください。

～映画『おろしや国酔夢譚』上映～

アムチカ島で遭遇したロシアの毛皮商人に助けられるのですが、何しろ言葉が通じない。注意深い者がロシア人たちが、「エタチョフ」(Что черо?)とよく言うのを聞きつけ、ひょっとして「これは何だ?」という意味だろうかと思ひ至ります。

画面は、試しに使ってみようかと相談しているところです。「Что чего?」は、ちょっと俗語的ですが、現代でも通じることは通じます。何かのために覚えておくとよい言葉でしょう。

ペテルブルグで女帝エカテリーナに直訴

ロシア人たちはラッコ獲りに来ていて、何年かするとロシア本土から船が迎えに来ることになっていました。ところが待ちに待った迎えの船がなんとまた難破してしまうのです。絶望するロシア人をしり目に、光太夫は、「いや、それなら船を造って本土に渡ろう」と、みんなを励まして船を造り、カムチャツカ経由でオホーツクに渡ります。そこから極寒のシベリアを横断してイルクーツクに行きます。当時のシベリアの中心地です。「日本に何とか帰してほしい」と役所に請願書を出すのですが、聞き聞き入れてもらえない。

ここで、運命的な出会いがあります。光太夫とキリル(キリロ)・ラクスマンとの出会いです。ラクスマンは、鉱物学や植物学、博物学の専門家で、なんと日本事情にも通じている当代きっての学者です。ラクスマンは光太夫らにいたく同情し、「請願書を出してもだめなら、これはもうエカテリーナ女帝に直訴するしかない」ということで、光太夫とともにペテルブルグに行きます。

ところがせっかく到着しても、一向に埒が明かない。まもなくエカテリーナは、ツァールスコエ・セローという夏の宮殿へ避暑に移ってしまう。そこを追って、ようやく拝謁します。ラクスマンの尽力、政府高官たちの口添えもあって、やっと許可が下り、そこで、また東へ逆戻り。イルクーツク、オホーツクをへて、ようやく船で日本に向かうことになります。

日本を出るとき 17 人いた仲間は、漂流中の船上、アムチトカ島、カムチャツカ半島で次々に亡くなり、イルクーツクに辿りついたのは 6 人。そのうちの一人もまた亡くなり、残った 5 人のうちの一人、西田敏行演じる庄蔵が、凍傷にかかって足を切断し、絶望してロシア正教に改宗してしまいます。改宗は、キリスト教御法度の日本への帰国断念を意味します。さらにもう一人若い新蔵も、大病の挙句、ロシア正教に改宗してしまいます。こうして最後に残った光太夫、磯吉、小市の 3 人だけが、船で根室沖に戻ってきます。ところが世は鎖国の時代なので、簡単に帰国許可が下りない。足止めされているうちに、日本を目の前にしながら小市が壊血病で亡くなってしまいます。結局、帰国の夢を果たせたのは光太夫と磯吉の二人だけでした。涙なしには見られない場面ですが、続けて映画で見てください。

～映画上映～

さて、ここが重要なポイントです。ペテルブルグでの請願の際、光太夫はエカテリーナから「ロシアに来てどうです?」と問われた時に、「ロシアで新たに生まれかわったようだ」、「自分が日本人だと初めて知った」と言います。これが私は、おそらく留学のもつ最大の意義だと思います。

光太夫がロシア政府の方針を変えさせた

光太夫の前にもたくさん日本人漂流民がいました。ピョートル大帝に会った漂流民もいます。しかし、「日本に帰してくれ」と請願し、だめと言われても「絶対に帰してくれ」と言い続けたのは、おそらく光太夫だけです。

なぜ光太夫が帰国の夢を果たせたのでしょうか。

それまでロシアが漂流民を帰さなかったのには次のような事情があったのです。当時、ロシア人はシベリアを横断してアメリカ大陸まで進出し、ロシアの毛皮商人はカリフォルニアあたりまで行っています。ところが本国からあまりにも遠く、食料や薪などの補給基地が欲しく、そのため日本との通商が絶対必要だったのです。通商の為には日本語の通訳が不可欠です。そこで、漂流民に給金を支給して日本語教師としてロシアに留まらせていたのです。

ところが、光太夫は断固として日本語教師としてとどまることを拒否しました。ロシア側は給金をやめると「兵糧攻め」にしましたが、光太夫は折れませんでした。ラクスマン、光太夫らがロシアの高官や宮廷の役人たちを辛抱強く説得した結果、なんとロシア政府の方が方針を変えたのです。これまでは漂流民を日本語教師として留めていたけれども、これからは光太夫らを日本に送り返すことによって、日本との通商条約を結ぶという方向にロシアが舵を大きく切ったのです。この時、光太夫が方針を変えるきっかけの一つになったことは間違いありません。

ペテルブルグの「光太夫ブーム」

光太夫という人は、本当に魅力的な人物で、どこでも、誰からも一目置かれ好かれました。人の縁にも恵まれました。イルクーツクでは、「兵糧攻め」の際など豪商の家に招かれて日本の話をきちんとロシア語で語り、人々を魅了する術も身に着けました。ことばをきちんと身に着ける、これもまた、留学の大きなポイントの一つだと思います。

ペテルブルグでは一種の「光太夫ブーム」が起きたほどです。なぜかという、話が前後しますが、光太夫がカムチャツカにいた時に、スエズ運河を作ったフェルディナン・ド・レセップスの叔父のバーソロミュー・レセップスに会っているのです。この人は探検航海中で、後に旅行記をフランスで出版しているのですが、その中で光太夫の人物、ロシア語能力を絶賛しています。この本がいち早くヨーロッパで流布され、ロシアにも先に伝わっていたので、「ああ、あの有名な光太夫さん」というわけです。

光太夫は女帝エカテリーナに 2 回も拝謁しています。さらに女帝の息子(皇太子)と孫に非常に好かれて、宮殿に何度も招かれているのです。外務次官や内務大臣にも招かれ、ロシアの上流階級の人々をつぶさに観察しています。日本に帰国後は徳川家斉(第 11 代将軍)にも会っています。日本とロシアのトップに会い、しかもその内部にまで深く入りこめた人は、日露交渉史が始まって以来、光太夫を除き今も

他にはいないと思います。

さらに、単に会っただけではなくて、光太夫は記録を正確にとっています。この人のおかげで、ロシア側に記録が残っていない当時の事情を知ることのできるのです。残念とか、素晴らしいことかというか、ロシア語関係者で光太夫ほど世界的に知られている人はいません。最近、イギリスで「光太夫をなんとか我が物にして、日本と交流を図りたい」という、ロシアでの光太夫争奪戦を示す手紙も発見されたそうです。光太夫の「留学」の全貌の解明が待たれますね。

光太夫はエカテリーナに対しても、誰にも、どこでも全く物怖じせずに堂々として尊敬の念を勝ち得ていたようです。幕末の日本人で、歴史に名を遺した人は、一様にロシア人から尊敬されています。あのプチャーチンと伊豆半島の下田で日露和親条約の交渉にあたった幕臣・川路聖謨もそうです。交渉では一步も譲歩しない。それでも、ロシア側は、人物をほめ称えています。私たちが先輩達にぜひ見習いたいものです。

なぜ帰国できたか？

さて、なぜ帰国できたのかという話にもどると、一つは光太夫の人間的な要素です。人柄、毅然とした態度、それから国際感覚。当時のリーダ格の人は国際感覚が非常に優れていました。司馬遼太郎の小説『菜の花の沖』に描かれる高田屋嘉兵衛もそうです。この小説をまだ読んでない方は是非読んでみてください。ロシアとの紛争を平和裏に解決した高田屋嘉兵衛は、現代でもどこの世界でも有能な外交官として十分通用します。

二つめは、船頭としての責任感です。船頭として、部下たちを絶対に国に帰そうとしました。そのためには、ロシア側とコミュニケーションを行い、交渉しなければいけない。交渉はまさかパントマイムでやるわけにはいかないので、必死になってロシア語を身につけました。光太夫はヨーロッパ語の概念を全く知らなかったのです。なのに、身につけました。どの程度できたかという研究がいろいろあるのですが、例えば、ウクライナのキエフ大学のボンダレンコ先生は、光太夫のロシア語を分析して高く評価しています。なにしろ「鼻の孔」という単語の語構成まで分析しているのです。光太夫が日本語・ロシア語の辞典を作ったかどうかは微妙なところですけれども、少なくとも辞典を作る手助けはしています。日本のスラヴ学、ロシア語学の開祖といってよいと思います。

このように、光太夫から学ぶべき点は沢山あるのですが、もっとも大事なものは、意志です。学ぶ意志・動機がとてつもなく強い。日本に最終的に帰れたのは、磯吉という若者と光太夫の二人だけだったのですが、この二人がロシア語の学習に一番熱心だったという記録があります。他の人たちが将棋を指して遊んでいる時にも、一生懸命勉強しています。外国語学習ではこのような努力の積み重ねが実を結びます。でも私は年だからという方、光太夫がロシアに漂着したのは

30 歳を過ぎてからです。それでも意志さえあれば辞書も文法書もなくとも身につくのです。

II. 様々な留学、「留学」の形

ロシアは巨大な“大化け装置”

では話を留学に戻します。留学には様々な形がありえます。決して定形があるわけではありません。

プリントに沿って話します。最初の T さんは、東京外大のロシア語専攻の学生でした。当時、JIC さんのようなロシア留学を取り扱う団体がなく、かつ外大にはロシアとの交換協定もありませんでした。それで、交換協定のあった某大学の学生ということにしてもらい、モスクワ大学に行きました。ところが、T さんはモスクワ大学には興味がなくて、某芸術系大学に勝手に入りこみました。当然、最初は、先生が「お前はなんだ」と言っただけで、「私は是非先生のもとで学びたい」と熱心に頼んだら、「ああ、わかった。来い！」(笑い)。それで懸命に勉強して、今では日本の、この部門の第一人者です。「人生変わっちゃった」のです。

次の G さんに至ってはもっとびっくりです。やはり東京外語のロシア語専攻でした。天性の美声の持ち主で歌が上手い。「オペラの勉強がしたい、是非、M(エム)劇場に行きたい」と私のところに相談に来ました。私は、「ロシアというのは不確定性の国だから、ダメもとで手紙を書け」とアドバイスしました。そしたら OK が出たのです。OK はいいのだけれど、授業料の額が高額で、相談に来ました。「これこれ、こういう風に手紙を書いたら」とアドバイス、すると大幅に減額になりました。今ではオペラ歌手として活躍しています。

最後の K さんは日本のある大学の学生さんでしたが、今の研究を極めたいとモスクワに留学しました。そこで K さんは最高の先生に巡りあい、見事な論文を書き、今では日本の、その分野のトップクラスの一人として大活躍をしています。T さん、G さん、K さんが、もし留学しなかったら、全く別の人生を送っていたはずです。

「留学」(カッコつき留学)

小説家で翻訳家、評論家でもあった高杉一郎さん、また文化人類学者で国立民族学博物館名誉教授の加藤九祚さん、この二人は、あまり楽しい話ではないですが、シベリア抑留経験者です。私はこれを「留学」(カッコつき留学)と称しています。

高杉一郎さんは、シベリアで非常に厳しい体験をしました。通常なら反感を抱いて帰ってくるのですが、ロシア人の人間性、精神性に打たれて、抑留体験をもとに「極光のかげに」という見事な作品を書きあげました。これは、芥川賞候補になり、ベストセラーになったほどのすぐれた作品です。

加藤九祚さんもそうです。抑留されながらもロシアに惹かれて、シベリアや中央アジアの諸民族を研究する文化人類学者になりました。ご高齢ですが、今もウズベクで発掘調査

をしています。お二人は、シベリア抑留という特異な体験ですが、なぜかロシア、ロシア文化に触れた人というのは、人生が変わるようです。

作家の島田雅彦も外大ロシア語科出身です。作家としてデビューする前に、なんでロシア語を選んだのかと聞くと、ロシアのアバンギャルドに惹かれたと言っていました。おそらく、ロシア文化に触れなければ、今のような作家ではなかったと思います。

Ⅲ. 留学とは、異文化間理解

留学は不確定性に満ちている

異文化間理解ということで、私の体験を交えながら話しますと、留学と旅行は全く違います。私は在外研究(留学)する前に、ロシアの相当な奥地にも出張や旅行で行っています。でも、留学とは全く違います。出張というのは、辞書によれば「公務・社用で臨時に他の地域・場所に出かけること」。一定の任務遂行のため、通常はよくわかっている所へ行って、既定のスケジュール、既定の条件の下で滞在しすぐ帰国します。

一方、留学というのは不確定性に満ち満ちています。知合いの R 教授は、留学生選抜試験で「君はどういうつもりで行くのだ」と聞き、「しっかり計画を立て勉強するつもりです」と答えた学生は全員落としたそうです。ただし、これは一般論ではありません。試験の時に、学生が「私は何も計画などありません。遊ぶつもりです」と言ったら、私なら落とします(笑い)。でも R 教授は「計画を立てている人」を落としました。留学というのは、たとえどんなに緻密な計画を立て、たとえよく事情の知られているアメリカに行くにしても、不確定性に満ちており、計画通りに決して行かないものです。それを受け入れられる心のゆとりのない人は精神的に耐えられない、ならば予め不合格にした方が親切だということでしょう。

大黒屋光太夫には計画も何もありませんでした。そもそもロシアなど知りませんでした。でも耐え抜いたのです。それは柔軟性と心身の強靱さがあったからでしょう。

留学＝第二の誕生

先に光太夫が「ロシアで新たに生まれかわったようだ」という言葉を見ました。

私は、留学というのは、第二の誕生じゃないかと思います。今まで見たことのない自然環境、社会、食事とか生活習慣、それから文化、言語に触れなければならない。赤ちゃんは第一の誕生をしますが、赤ちゃんの場合はゼロからの初期化です。まっさらなところに新しいものを入れます。赤ちゃんは誰も、「前と違うよこの味は」なんて言いません。

留学する人は、第一の誕生をした後です。具体的には日本の自然、社会、文化、言語、特に価値観に馴染んでしまっています。そこで、第二の「世界」へ留学すると、想像を絶するほどのギャップを感じます。ですから柔軟に受け入れる

心と体力(別にマッちょである必要はありません)、条件が無いとだめなのです。

極言するなら、これまでのほとんどすべてを捨てて、現地の現実を受け入れる必要があります。まず間違いなく、予想外のこと、想像を絶する事態、どうしようもない事態(Ничего не поделаешь.)と言いたくなる事態に遭遇します。

ロシアは不確定性の国 ①

私が留学でモスクワ大学に受け入れ許可をもらった時のことです。「私の住所はどこですか?」という私の質問に、「迎えが出るから知らなくてよい」との返事でした。さて、現地の空港に着きました。空港出口で、他の人は、「〇〇さん歓迎。〇〇大学」とか書いた紙切れをもった迎えが来ていました。私の方は、見回せど見回せど私の名前無し。1 時間待ち、2 時間待ち、3 時間ほど待ち、でも迎えは現れない。しょうがないから、逆に「モスクワ大学様 中澤」と書いて辺りを見回す。それでも迎えの人はなし。とうとう夜も更けて空港には、人影がまばらになってきました。私はどこへ行っていいかわからない。住所は教わっていません。

でも、知らないというのは強いものです。私は、モスクワ大学というのは雀が丘の本館しか知らなかったのも、そこに乗りつけて、「僕はここに住むことになっているはず」と言ったらすんなり中を通れた。実は、通行証がないと絶対に入れないのですが、そんなこととはつゆ知らなかったのです。知らないから押しかけて通ってしまった。入ったはいいが、今度はどこ行けばいいかわからない。ですから、この人かなと辺りをつけて事情を説明しました。後でわかったのですが、実は迎えは出ていなかったのです。皆さん、大学の担当者はその時何と言ったと思いますか。「お前が悪い。土曜日に来るやつがどこの世界にいるか」(笑い)。

光太夫とはだいぶ質が違いますけれど、まあ、そんなものです。これはずっと昔のことなので、今はそんなことはありません。第一、JIC さんという強い味方がいます。皆さん安心してください。

ロシアは不確定性の国 ②

今度は最近の体験です。4 年ほど前に、私は、モスクワ言語大学へ調査に行くことになりました。当然のことながら、事前に連絡しました。「何月何日、こういう方に会いたい」、「OK」。「ああ、意外にすんなりいったな」と思い、念のため出発の前日にメールを送ったら、「私は明日から休暇をとる。」「えっ」、「でも心配するな。〇〇さんにお前のことを頼んでおく」、「ああ、良かった」。さて、現地に着きました。「現地に着いたら〇〇さんに電話しろ」という指示通り、電話しました。答え、「その人、今日はいません」、……(笑い)。

どうですか、皆さん。このくらいでへこたれたらだめですよ。それで、事情を説明すると、「わかりました。私が代理をします。〇〇駅に来てください」。それで指定された日に地下鉄に乗ってやれやれ安心と思った時、車内アナウンス「〇〇

線は今日閉鎖です」。皆さん、どうしますか？ 閉鎖ですよ。私は、担当者の顔を知らないし、公費主張ですから中止はできない。えらいことです。それで駅の係員に聞くと、「ああ、この環状線は閉鎖しているけれど、縦に通っている別の線は閉鎖してないから、そこから行けばいい」。

これがロシアです。ロシアっていうのはすべて不確定性なんです。約束していても、約束したその日の朝にならないとどうなるかわからない。……。

皆さん、大丈夫ですか？ (笑い)。

ですから、ロシアに行った人は強いですよ。ダメって言われても、「だめ？ ふ～ん」、「それで、どういう条件ならいい？」。気弱だった女子学生がものすごく逞しくなって帰ってきます (笑い)。

日本の再発見

留学というのは、とにかくそこに長期間住まなければならぬので、今までの価値観、生活スタイルを押し通そうとしても無理です。かつて「醜いアメリカ人」とよく言われました。世界中どこへ行ってもアメリカ流の食事をし、シャワーを浴びて、アイスクリームを食べて、現地人を見下していました。今はどうか知りませんが、昔はそうでした。このスタイルでは留学は無理です。現地の流儀に従わないとやっていけません。

そうすると、現地を理解すると同時に、今まで育った日本との相違に気付き、日本や自分を客観的にみて新たな発見をすることになります。日本や、自分を考えるために留学するわけではないでしょうが、どうしても再発見することになります。ある有名作家が若い時、留学に旅立つ時、見送りに来た先輩が「お前、あっち行って日本のことよく勉強して来い」と言ったそうです。なるほどと思います。どうしてもそうなるんです。

価値観の変換

留学では行動規範の変化、価値観の変換が起こる、これが大いそうですね。私はロシア人に「お前は、ありがとう、すみませんと言いつづる」と注意されました。ロシア語で「ありがとう」(С п а с и б о)は「бо(г)神様が спаси お助けになりますように」がつづまったものです。「人間として当たり前のことをしているのに、お前、神まで持ち出すのは大げさすぎるんじゃない？」。

一例をあげます。私が研究留学に出る時代、東京外大でご法度の学問領域は意味論、それとイントネーションでした。私は、語と語をどう組み合わせたらいいかというような研究に行ったのですが、ロシア人の指導教官がそのテーマならばイントネーションをしなさいと言うのです。「まずい、イントネーションか。これで論文を書いたら帰国後はどうなるんだろう」。ところが学んでみたら、きわめて面白い、大発見です。

なぜ大学では事実上ご法度だったのでしょうか。意味論

とイントネーションというのは厳密な測定になじまない。測定出来ないものは科学ではないとされていたのです。ところが、今はどうでしょうか。意味論はほぼ最盛期で、イントネーションも計測できるようになって立派な科学の対象になっています。パソコンで入力すると、イントネーションの波形が鮮やかに出ます。この人のイントネーションはこうだと確定できるのです。

価値観は国によってだいぶ異なります。日本で推奨されることがロシアではダメ、あるいは、その逆もあります。光太夫たちも価値観を変えざるを得ませんでした。漂着した 1783 年(天明 3 年)、浅間山が大噴火。火山灰が太陽光を遮り、世界の気候に影響を与え、日本では天明の大飢饉でした。現地も食糧不足で、食べ物がほとんどなかったのです。それでもロシア人は助けてくれました。ロシア人は、困った人は絶対に助けるのです。でも助け方がロシア式なのです。「この肉を食え」。ところが当時の日本人は四足動物の肉は食べてはいけなかったのです。それで拒否した人は衰弱で死んでしまいました。肉はだめと言っても、米はないし、魚はないし、食べる物がなかったのです。そこで日本式価値観を変換できた人は助かったのです。

バラ色 ⇒ 灰色 ⇒ そして理解・認識

異文化間コミュニケーション、異文化間理解という学問の教えるところによると、外国に着いて最初の 3 カ月間はバラ色の時期です。何を見ても、何を発見しても、まず驚き、そして感激する。私もそうでした。

「いやあ、ロシアっていいな」。

何しろ私が行った時は、知り合いが誰もいない。東京外大にはロシアとの交換協定がなかったので、何もない。コンサイス露和辞典で有名な井桁貞義氏は私とほぼ同時にモスクワに着きました。氏の早稲田大学は交換協定があるので、極端に言うと、何も持たずに現地についても、部屋には冷蔵庫から、電話、食器、全部あるのです。一方、私のところは学生寮の一室で、ベッド、机以外は何もない。

私は、昔はもう少しふつくらしていたのですが、私の隣に住んでいた婦人が、「あなた、なにか食べてるの？」、「こんなに痩せて、私のとこへきて食べなさい！」。それで食事にありつけました。いやあ、感激しました。「やさしいなあ！」。(女性は驚いたと思います。いくら食べても太らないので(笑い))。

ところが、3 ヶ月たったら、今までわかっていたロシア語が急にわからなくなったのです。「何でかなあ？」と考えてみたら、その時知り合いがどんどん日本に帰っていたのです。夜、夢を見ても、不思議なことに、子供の時のふるさとの風景、家なのです。「ははあ、これは灰色の時期に入ったのだ」と悟りました。

最初のバラ色期が灰色期に変わる。そういう時期になると、嫌なことばかり起こるのですね。地下鉄に乗っていたら、大

男が私を掴んで、「おまえみたいな薄汚いアジア人は地下鉄に乗るな。出ていけ!」。私は、何かのんきなところがあって、「これは、面白いなあ」と思って逃げない。で、目の前の人に「私はこういう時どうしたらいい?」と聞いたら、「逃げろ!」。逃げられないですよ、掴まえてるんだから(笑)。そういう嫌なことが連続して起こるのです。

灰色期は平均的に言うと 3 か月続くのです。発見、驚きの次は、落胆、絶望の灰色期です。留学生の中には、ここでノイローゼになって帰っちゃう人がいます。私は、ある程度知識があったので、何とかやり過ごしました。それまで私はラーメンが大嫌いでした。ところが、教え子の JAL のスチュワーデスが、「先生、ラーメン余ったから食べて」と持ってきてくれました。食べてみたら、「こんなおいしいものが世の中にあるのか!」。人生観(好み?)が変わりました。

この灰色期がいつ終わるかという、ロシアの研究では、その人の留学先への先入観次第だそうです。考えて見たら、私は、非常に日射量の多いところで育ったのに、モスクワに着いて 10 月から 12 月まで太陽をまともに見ていなかったのです。道を歩いていて、「なんであそこが丸いのかなあ。」としてみると、それが太陽。灰色の空の中にぼわあ〜と白い丸いのがあるだけ。この灰色期は、体温を測っても異常はないし、悪寒も何もない。なのに、さっぱり何かをする気が起こらないのです。

この時期の次、最後が「発見、驚き、でも、理解・認識」の期間です。皆さんが留学する時は、最初は、「この人、優しい! ロシア料理おいしい! 景色が素晴らしい!」(発見、驚き、感激)。次に、全部が嫌い、(発見、落胆、絶望)します。でも、そういう時期だと思ってください。ここでノイローゼになるのは損です。だいたい、よく寝て、よく食べることです。そうすると、最後にロシアがわかってくる(発見、理解・認識)のです。

繰り返します。留学というのは「第二の誕生」です。これまでの人生観、見方の、何から何まで捨てる必要はないですけど、その中の捨てられないエキスと現地の現実をあるがままに受け入れ、現地のエキスに溶け込ませないといけな

IV. ロシアへの留学とは

ロシアはヨーロッパかアジアか

ところで、ロシアとは一体何でしょうか。皆さん、ロシアはヨーロッパだと思いますか、アジアだと思いますか? アジアだと思う方、手をあげてください。……、少数派ですね。ロシアにいたとき、このような質問を私はロシア人から何度も受けました。

「ロシアはアジア人のあなたから見てヨーロッパか、それともアジアか」

何度も聞かれるうちに、わかってきました。私はしばらく考え

るふりをして、「やはり日本人の私から見ると、ロシアはヨーロッパですね」と答える。そうすると彼らは喜ぶのです(笑)。で、そのあと、「ヨーロッパの中のアジア」(ロシア)と「アジアの中のヨーロッパ」(日本)は、どちらがヨーロッパ的だろうかという質問を投げました。

ロシアと日本というのは、異なることが多い反面、意外や意外、似ていることも多いのです。

日本は地理的にアジアです。ロシアは地理的には、ウラル以東は別ですがヨーロッパです。

思考法の面では、日本は一元論で、思考法の一つの現れである文で、主語と述語を分けなかったりします。「ああ、寒い」、「ああ、痛い!」などではどれが主語でどれが述語でしょうか。ところがヨーロッパの言語は主語、述語を明確に分ける二元論です。「It is raining.」などと言う。この It は何? 何だかわかんないけれど It です。主語と述語、人間と自然、明確な二分法をとります。ところがヨーロッパの言語であるはずのロシア語に、「ハラショー」という文があります。これには主語がありません。このように起源が違うはずなのに、日本語とロシア語は本当によく似ています。

ことばの根底にある思考法において、日本語はよく飛躍します。その典型的な現れが俳句です。飛躍のない俳句は、俳句と呼べるでしょうか。それに対してヨーロッパ的思考法では、緻密にレンガを積み重ねるごとく、一つ一つ着実に、段階的に思考します。

アジアは一般にファジー、曖昧です。それに対してヨーロッパは一般的にデジタル、厳密です。

ところが、ロシアというのは不思議で、言葉の起源、宗教、人種も大筋において欧米と共通のはずなのに、欧米とは異なる面が多いのです。現象面に過ぎないかもしれませんが、ロシアも日本もアジアとヨーロッパの狭間にあり、欧米の尺度をそのまま適用できません。

似ている時間意識(アスペクト)

私は語学が専門なので、その例を出しましょう。時間意識の面でもロシア人と日本人は似ているところがあります。昭和 30 年代以前の日本人は、ロシア語文法でいうアスペクト的時間意識でした。たとえば、町内で会議が 8 時開始だとしても、「この仕事を終えてから行こう」です。会議が厳密に定刻 8 時に始まることはありませんでした。ところが昭和 30 年代、高度経済成長期以降は、「時は金なり」で時間を守るようになってきました。でも、学生を見ていると、今もってやはり『これが終わったら行こう』なんて言って定刻に遅れる人も結構いますよね。

ロシア語は、英語、ドイツ語、フランス語などとは異なり、過去、現在、未来という動詞の時制よりもアスペクト性が強い言葉です。アスペクトというのは、事態の推移、進展に区切りをつけるかにつけないかで区別し、言葉(動詞)で表現することです。たとえば、今、私は話していますけれども、皆さ

んの中には「この話が終わったら、コーヒーを飲もう」などと考えている方もいらっしゃると思います。私の話はまだ終わってないのです。でも、終わっていないのに、コーヒーを飲むという目的があると、言葉の上ではいったん「話す」という動作に区切りをつけ「おわったら」と言わないと次に移れない。この『終わったら、〇〇しよう』がアスペクト的な表現です。日本語もアスペクト的要素が強い言葉です。別の例です。仮に、私がここでモタモタして何も始めなかったら、誰かが『さあ、始めた！』なんて言いますね。「始めた」という過去形(と同じ形)なのに、意味は『さあ、始めようぜ、始めて』。これは、ロシア語でも、「始める」という動詞の過去形で同じように言えます。でも英語では言えませんね。このように日本語とロシア語には驚くほど共通点があるのです。

ロシア人の好感度ナンバーワンは日本

ちょっとこの歌を聞いてみてください。

～「恋のバカンス」の一部をロシア語と日本語で聞く～

ザ・ピーナツの「恋のバカンス」ですが、1960 年代にロシアに伝わって一世を風靡しました。今でもロシア人はこの歌が大好きです。

これは一つの例ですが、ロシア人は日本のメロディーが好きなんです。日本人も、最近ではちょっと下火になっていますが、昔はロシア民謡がそれは盛んに歌われたものでした。そのためもあってか、ロシア人の日本に対する好感度は非常に高いのです。数年前の調査では、ロシア人が世界の民族の中で一番好感を持っていたのは、なんと日本人です。中国人でもない、フランス人でもない、日本人なのです。このように、ロシアと日本は何か共通するものが多いのです。

心情的にも非常に近いのです。俳句あるいは短歌のロシア語訳、たとえば万葉集をロシア語で読むと、万葉集の素朴な、ごつごつした感じが、ロシア語は日本語より子音が多いためか、見事に訳出されます。徒然草の序段もそうです。「つれづれなるままに、日暮し、すずりに向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそもの狂るほしけれ」。英訳では面白さが半減します。ロシア語訳では、ここまで訳せるものかとうなってしまいます。「そこはかとなく書きつくれば」では、誰が書いているのか、主語がありません。でもロシア語ではぴったりに訳せます。本当にロシアと日本というのは、本来のアジア的な一元論、ヨーロッパ的な二元論という区別を越えて似ています。

スラブ派と西欧派

これはあるロシア人の言葉ですが、「ロシア人は日本に一日いると本が書け、一週間いると論文が書ける。ところが一年滞在すると、頭を抱えてしまう」。

ロシアも同じです。ロシアはアジアなのか、ヨーロッパなのかという古くて新しい問題、ロシアの理想は西欧か古来のロシアかという問題は、今も形を変えてしばしば論じられています。スラブ派と西欧派の対立・論争がそれです。日本にも

「和魂洋才」などという言葉がありますね。西欧と日本の調和を図りつつ自己のアイデンティティを模索しようとして苦悶し続ける。ロシア人もヨーロッパとアジアの狭間で、自分たちは何者なのかと絶えず悩んでいます。このようなときロシア人はフォードル・チュッチェフの有名な詩をつぶやくのです。

ロシアは理性では解けず、

出来合いの尺度では測れない。

ロシアにはロシアの個性があるのだー

ロシアはただ信ずるしかない。(1866 年)

ロシア語は才能を開花させる？

こういうわけで、欧米でなくロシアへ行くと、今まで考えても見たことがなかったような、欧米的な眼では発見できない、何か素晴らしい世界が開ける可能性が大なのです。

最初に見たラクスマンのように、ロシアでは異邦人の漂民すらありのままの人間として扱ってくれます。日本なら肩書き、規則、制度にがんじがらめに縛られてとても会えないような、すばらしい才能の人にも会えたりするかもしれません。勿論、ロシアにも日本にも制度や規則はありますが、それよりも皆さんの人間性を見て付き合ってもらえます。若干生活面で不便はありますが、理想とする道にまい進できます。人間と人間でつき合えば、ちゃんと活路が開け、いろいろな可能性が展開するのです。いろいろな意味でロシアは広く豊かです。

それにロシアでは人間との付き合いが楽ですよ。何しろ言いたいことを言ってよいのです。相手と対立しても、それは言った範囲内においてであり、相手に対する敬意さえ失わなければ、人間的対立にはつながりにくいのです。だから、激論の後ケロリとしてにこやかに話ができます。日本ではそれができないですね。研究者でも、研究上の問題をうっかり批判しようものなら、一生絶交になったりします(笑)。ロシアでは言っているのだ。それがわかったので、私は、本当に楽で、向こうに行くと胃の調子が良くなるほどです。

最後に、これは私見ですが、「ロシア世界、ロシア語は才能を開花させる」。教授会の資料で気づいたのです。ロシア語専攻の学生は他よりなぜか大学院進学率がずば抜けて高いのです。また、学部卒業生も、ロシア語やそれ以外の分野の、自分の選んだ道で日本の第一人者として活躍している人がかなりいます。特別才能豊かな人だけをロシア語専攻だけが選抜しているわけではありません。なぜでしょうか。卒業生全員に共通する唯一の点は、ロシア語、ロシアを学んでいることだけです。ロシア、ロシア語を学ぶと潜在的な才能を刺激し、開花させるのではないか。しかも大化けさせる。私は、そう思います。

最後に唐突ですけど、実は、石川啄木もロシアに憧れていました。私も啄木にならって、日本文化の典型的な現れである和歌を一つひねってみました。

「これやこの 啄木の憧れし モスクワの ……」

下の句がどうしてもできません。皆さんがロシア体験、留学をして新しい世界を発見し、皆さんの豊かな経験、深い思いを込めた、見事な下の句をつけて下さることを希望します。

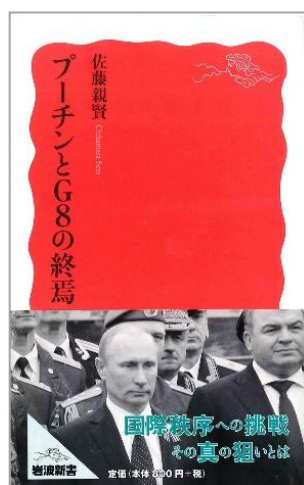
ご清聴ありがとうございました。

本の紹介

プーチンと G8 の終焉

佐藤 親賢・著

岩波新書/800 円＋税



以前、本欄で紹介した著者の『プーチンの思考』(岩波書店)の続編。2012 年のプーチン再選までを論述した前著に対して、それ以降のロシアとプーチン大統領の動き～ウクライナの「マイダン革命」とロシアによるクリミア編入(2014 年 3 月)、東ウクライナでの内戦(米ロ代理戦争)とミンスク合意(2015 年 2 月)、

シリア空爆(15 年 10 月)、原油価格下落で低迷する今日のロシア経済まで、ホットな話題をカバーしており、ここ数年間のロシアをめぐる情勢がよく整理されている。

ウクライナの政変とロシアによるクリミア編入の経過を詳述した第 1 章、その伏線となったソ連崩壊からウクライナの独立、オレンジ革命(2005 年)までを追った第 2 章、クリミア編入以降、熱狂的に右傾化するロシア社会の変化を扱った第 4 章、それぞれにジャーナリストならではの視点と取材を通じて得た機微な情報が盛り込まれており、ロシアと国際政治に関心のある人に格好の読み物となっている。文章もわかりやすく、読みやすい。

しかし、著者の最大の関心は、本書の題名にあるとおり、ウクライナ危機が今日の国際政治に対して持つ意味と、その中でのプーチンという政治家の強烈な個性である。

クリミア編入後、ロシアを取り巻く国際情勢は大きく変わった。「世界の舵取りをしていた主要国(G8)の枠組みから排除されたロシアは台頭する中国との同盟関係強化を図り、欧米中心の国際秩序に挑戦している。…。しかし、その発言や行動を見ていると、プーチンが目指しているのは『祖国ロシアの防衛』であって領土拡張や覇権主義ではないという基本的な認識は今も変える必要はないと思う。プーチン路線の基本は、冷戦終結後の『米国中心の世界秩序に対する不服従』である。インターネット嫌いで知られるプーチンは、米国主導の『グローバル化』に反対する潮流を体現していると言っ

てもよい。」と述べる著者は、「ウクライナ問題への介入は、厳しさを増す国際情勢の中でロシアの生き残りを図るプーチンの窮余の策」とみている。('はじめに'より)

しかし、その窮余の策が、戦後の国際秩序の根幹を大きく揺さぶっている。何故か。

「ウクライナ危機であらためて明らかになったのは、現在の国際安全保障秩序の中で中心的役割を果たしているはずの国連安全保障理事会の限界だった。第二次世界大戦の戦勝五カ国が拒否権を持つ常任理事国として中心的役割を担っている安保理は、常任理事国自身が侵略行為に手を染めた場合は、それをやめさせることができない。」

「安保理はウクライナ危機の解決にはほとんど無力だった。…。紛争の拡大を食い止めるための停戦合意を実現させたのはドイツ、フランス、ロシア、ウクライナの四カ国首脳会談であり、そこには国連も米国も加わっていない。今後、…ロシアが米国と対立し、安保理が機能不全に陥る場面はさらに増えると予想される。」

「南シナ海で岩礁埋め立てなど海洋進出を活発化させて東南アジア諸国と対立を深めている中国も、拒否権を持つ安保理常任理事国だ。この問題がさらに先鋭化し安保理に持ち込まれた場合でも、中国の拒否権で安保理が機能しないことはほぼ間違いない。ウクライナ危機は、70 年前につくられた現在の安保理は 21 世紀の激変する国際情勢に対応できないという悲観的見通しを暗示している。」('序章'より)

「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しよう決意した」日本国憲法の平和理念は、もともと第二次大戦後の国際連合設立時の民主主義原則と正義と自由に基づく国際関係の価値観に依拠したものだった。しかしながら、崇高な平和理念を掲げる国際連合の実態は、そのいずれもが大量殺りく兵器である核兵器を保有し、安全保障理事会で拒否権を持つ米英仏ソ中 5 カ国による「戦勝国連合」だった。そのことは、国連憲章の中にも「旧敵国条項」(第 53 条)として明確に刻まれている。

旧ソ連がアメリカと互角の力を持ち、戦後の冷戦期を通じて一定の「力のバランス」が成立していた間は、国連安保理はソ連による拒否権の乱発という問題を抱えつつも、熱戦(世界戦争)を防止し、地域紛争を局地戦に押しとどめる平和機能をそれなりに果たしていた。

しかしながら、東西冷戦の終結(1989 年)とソ連崩壊(1991 年)は、欧米諸国主導のグローバル化とアメリカの「単独行動主義」「一極支配」を急激に進展させた。東欧諸国の EU および NATO への囲い込み、旧ソ連諸国のカラー革命(グルジア、キルギス、ウクライナなど)、イラク、アフガニスタンでの不正義の戦争、リビア、エジプト、シリアなど中東諸国への介入と政権転覆など、一人勝ちしたアメリカの傲慢な振る舞いが、国際情勢を一挙に流動化させた。

ウクライナ危機とテロリスト集団 IS(イスラム国)の跳梁に象徴される中東危機の背景にあるのは、一つは、欧米主導のグローバル化

に対する反動としてのナショナリズム(民族主義)の高まりであり、もう一つは、戦後の国際秩序を事実上独占的にリードしてきたアメリカの威信の著しい低下である。

「国際秩序の流動化」「戦後秩序の制度疲労」という著者のキーワードは、アメリカ主導で形成され運営されてきた国連＝「戦勝国連合」が機能不全に陥っている現状をよく表している。

しかし、プーチンとロシアの対抗論理もまたアメリカと同じ「力による秩序維持」、「核による平和」であり、プーチンの「反米闘争」が超大国アメリカの欺瞞を暴き、安定的な国際秩序を再構築する試みとして一定の意味があるとしても、それがどこまで普遍性と妥当性を持ち、世界の人々の共感を勝ち取ることができるかは大きな疑問だ。

これまでのところ、プーチンは状況対応型の政治家として類まれな能力と存在感を示しているが、どうみても理念型の政治家ではない。著者もその辺の事情を、政治雑誌編集長ルキャノフの言葉を引いて、「(プーチンは)今の世界で長期戦略を立てることが可能だと信じていない。すべてが予測不能だとすれば、いかなる戦略にも意味はない。長期的には『なるようにしかならない。それに対応するしかない』というスタンスだ。」と指摘しているが、もう一方では、「ウクライナ危機で露呈した世界秩序の不安定化と米国の威信低下は、プーチンの現実主義に対するオバマの理想主義の敗北といえるかもしれない。」とも述べている。

確かに、ウクライナ危機、シリア・イラクでの対 IS 戦争で確固たる存在感を示しているのはアメリカ・オバマ大統領ではなく、ロシア・プーチン大統領の方だが、理想主義を高く掲げない政治はやはり人々の賛同と共感を得ることはできない。オバマ大統領の理想主義が力をもたないのは、アメリカの国力低下もさることながら、本質的には「言っていることとやっていることが違う」からであり、世界中の人々がその欺瞞を鋭く見抜いているからだ。「唯一の被爆国」である日本もまた、アメリカの顔色を見て、人類最悪の大量殺りく兵器である核兵器の非人道性を G7 広島外相会議の共同声明に盛り込むのを遠慮するなど、国連と日本国憲法が掲げた平和の理念に背いている。ナチス・ドイツの Ауシュビッツ 絶滅収容所も日本軍の南京大虐殺も「人道に対する罪」、「平和に対する罪」であることは間違いないが、アメリカの広島・長崎への原爆投下もまた「人類に対する罪」にほかならない。

国連を中心とする「戦後秩序の制度疲労」が進んでいる今日、新しい国際秩序の枠組みを再構築する試みは、もはや主要 7 カ国(G7)だけでは実現できない。ロシアや中国、インドなど新興国を加えた新しい交渉の舞台と新しい平和理念が必要とされている。そのためには、アメリカや欧州からの視点だけでなく、ロシアや中国の指導者が世界をどう見ているのかをよく知らなければならない。本書は、国際政治において目が離せない存在となっているロシアとプーチンの思考を知る上で、格好の資料となっている。(伏田昌義)

本 黄 紹 介

50 歳からの海外留学のすすめ

～私のモスクワ日記

加藤美知世・著

2014 年秋に JIC の手配でモスクワ大学に 3 か月間ロシア語短期留学をした加藤美知世さんから本を送っていただいた。

加藤さんは、京都のロシア料理レストラン「キエフ」の取締役。約 10 年前に東京から京都に移住し、両親が経営するレストランの仕事を手伝うかわらロシア語の勉強を始め、50 歳にしてついにモスクワに 3 か月間の短期留学を敢行した。

本書は、加藤さんが留学中に毎日モスクワで書いた日記をベースに編集されており、合間に加藤さんの友人でありロシアの専門家でもある 8 名の方々のコラムがはさまれている。

一読して驚いた。著者は、14 年の 9 月中旬から 3 か月間ロシア人家庭にホームステイしながらモスクワ大学でロシア語レッスンを受けたわけだが、ほぼ毎日のように市内(あるいは郊外)に出かけ、友人らとレストランで食事をし、美術館や名所旧跡を訪ね、コンサート・劇場にも出かけている。そうして、食べ歩いたロシア料理のメニューをすべて記録している。

これは著者も言う通り、なかなかぜいたくな「大人の語学留学」だ。それだけに、この留学記は普通の若い学生さんにとってはあまり参考にはならないかもしれない。が、いわゆる団塊の世代が次々と定年を迎え、第二の人生を昔できなかった語学留学で始めようという人が結構増えている昨今、こういう留学の形もありうるのだという意味では、大いに参考になる。

「ものごとを始めるのに遅すぎるといことはない」と言われるが、それにしても 50 歳にして果敢に語学留学に挑んだ著者のバイタリティはたいしたものである。これは、子供のころアメリカで暮らした経験に由来するのかもしれないが、著者がしっかりと自己主張できる性格で、誰とでもすぐ友達になり、いろいろな頼みごとを臆せずに行える特性をもっているらしいことが、「50 歳からのロシア語留学」をかくも充実したものにするのができた要因ではないかと思われる(いろいろ頼みごとをされる側はやや迷惑かもしれないが、そんなことで遠慮してたら何もできない)。

慣れ親しんだ生活環境を離れ、短期間であっても異文化の中に身を置くということは、多少なりとも勇気が必要だ。ましてや年齢が高くなるほど心理的ハードルも高くなっていく。そこを軽々と飛び越えるために、「大人の語学留学」を検討中の中高年の方々に、ぜひ読んでほしい留学記である。(伏田)

発行：ドニエプル出版／定価：2000 円＋税

【知られざる日露の歴史】

遥かなる「浦潮ス徳」日本人街を語る

大阪で日露歴史シンポジウム(2 月 11 日)

2 月 11 日、大阪で、明治・大正時代のウラジオストク日本人街を語るシンポジウムが開催された(主催; 関西日露交流史研究センター)。講師は、ウラジオストク日本人街研究の第一人者であるロシア極東連邦大学のゾーヤ・モルグン助教授、日本ウラジオストク協会理事の堀江満智さん(祖父・堀江直造と父・正三がウラジオで堀江商店を経営)などで、参加者は約 60 人。昔と今の写真などを使って、ウラジオストク日本人街の様子が興味深く語られた。

ウラジオストクは 1860 年に港が作られ、ロシアの太平洋への出口として急速に町が発展した。明治時代になると 1876 年に日本貿易事務官(のちの総領事館)が置かれ、翌年から長崎～ウラジオの定期航路が開かれるなどして、日本人が移り住むようになった。日露戦争(1904～05 年)前には 3000 人近い日本人が定住し、その多くが貿易や商業活動を営んでいた。大半は個人商店だったが、当時、ウラジオストクに約 280 あった企業のうち、実に 3 分の 1 が日本人商店だったという。西本願寺浦潮別院や日本人小学校が作られ、「浦潮日報」という新聞も発行されていた。ウラジオストクの町の発展には、日本人居留民の活動が大きくかかわっていたのだ。

日露戦争で一時中断したものの日本人居住者は増え続け、最盛期には約 5000 人、その商店や工場は 250 を

数え、日本人とロシア人との共存関係が築かれていたが、ロシア革命(1917 年)とそれに続く日本のシベリア干渉戦争(1918 年～22 年)が、この平和な日露市民の関係を断ち切った。

産声をあげたばかりのソビエト国家に対する 5 年間にわたる日本の執拗な侵略行動の片棒を担がされた日本人居留民たちは、干渉戦争の失敗とともに、ウラジオストクから「総引き揚げ」せざるをえなくなった。こうして、1922 年(大正 11 年)以降、ウラジオ日本人街は急速に衰退し、1937 年には民間日本人は皆無となってしまった。

その後、ソ連時代末期(1990 年)までウラジオストクは外国人立ち入り禁止の軍港都市となり、長らく日本との関係が途絶えていたが、新生ロシアになって以降、この四半世紀の間に、再び日本とロシアとの新しい関係が作られるようになった。かつて多くの日本人が暮らしたウラジオストクを舞台に、その歴史にふさわしい新しい日露の市民関係が発展していくことを期待したい。

関西日露交流史研究センター <http://kansainichiro.blog.fc2.com/>

日本ウラジオストク協会 <http://jpvlad.com/>

* * *

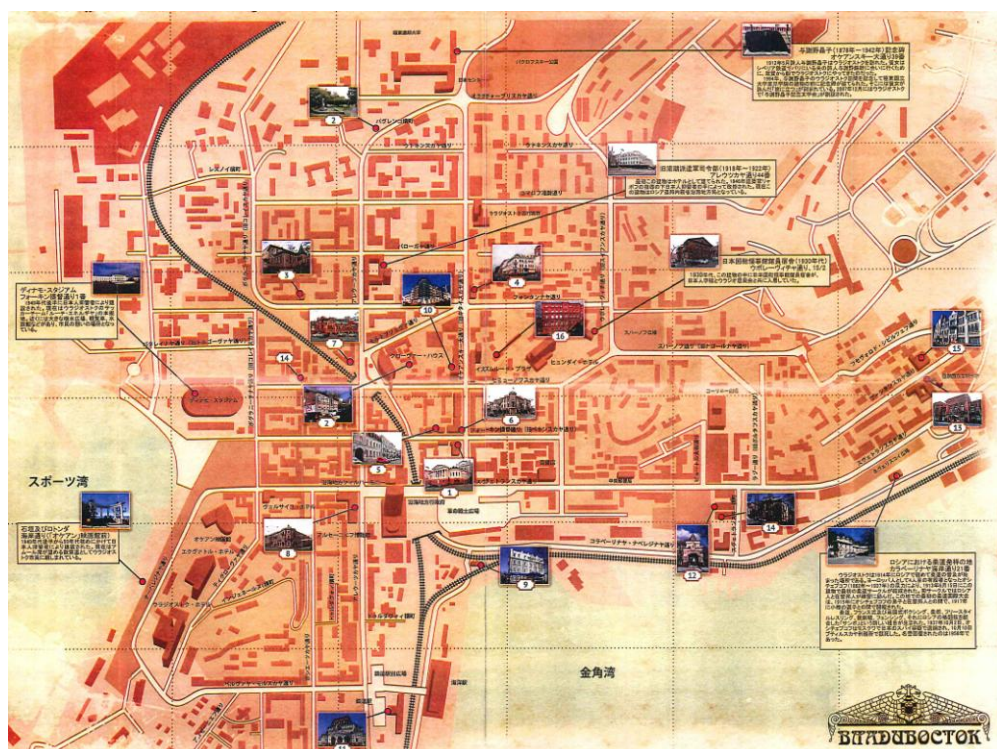
なお、日本ウラジオストク協会や藤本和貴夫・大阪経済法科大学学長、モルグン助教授ら日露の研究者が編集し、在ウラジオストク日本総領事館が発行した「浦潮旧日本人街散策マップ」は、ウラジオストク市内に今も残る日本ゆかりの建造物や旧跡 16 ヶ所を紹介しており、ウラジオストクの歴史散歩の格好の手引きとなっている。

あなたも、ウラジオストクを訪ねたら、浦潮本願寺跡や旧日本人小学校などを巡り歩いてみませんか。

↓ 浦潮旧日本人街散策マップより

＜ウラジオ散策マップ 主な旧跡＞

- ① 旧日本総領事館
- ② 浦潮本願寺跡
- ③ 旧日本人小学校
- ④ 旧松田銀行部
- ⑤ 旧杉浦商店
- ⑥ 旧朝鮮銀行
- ⑦ 旧妹尾商店、堀江商店、太田商店
- ⑧ 旧横浜正金銀行
- ⑨ 旧商船組
- ⑩ 旧「浦潮日報」編集部
- ⑪ ウラジオストク鉄道駅
- ⑫ ニコライ皇太子凱旋門
- ⑬ 旧東洋学院
- ⑭ 二葉亭四迷が滞在した家
- ⑮ 松井須磨子が出演した劇場
- ⑯ 作曲家・入野義朗の生家



カムチャツカ・アヴァチャ山 登山記

《その3》

白井 秀治 (JIC 東京)

登山道は徐々に勾配を上げて行きます。足元は、富士登山経験者の方ならお分かりかもしれませんが、一歩足を出して踏み込むと 5cm 位下がってしまうあの感覚です。進んでいるにもかかわらず、少し下がってしまうあの煩わしい感覚の上に強烈な風。頂上がどんどん遠のいて行くような錯覚に見舞われます。そして、まだ一時間しか歩いていないのに、ガイドさんの歩行速度と私の歩行速度に若干の差がついてきました。2~3m 先を歩いていたガイドさんがいつの間にか 5m 位の差で歩いています。慌ててはいけません。急ぐと逆に体力を消耗してしまいます。10m 位離れたらガイドさんに声をかけることにしました。ただ、声を出しても届くかどうか…。

風は一向に止む気配がありません。時計を見ると、休憩後すでに 1 時間が経っています。休憩する余裕もありません。ガイドさんからもゆっくりでもいいので歩き続けましょうと提案がありました。もちろんそれが現状では一番良い選択です。私も提案を受けました。

状態は悪くなる一方です。もの凄い勢いで風と共にガスが降りてきてレインウエアに付着する水滴が凍りつき、手で払うとポロポロと氷が落ちるくらいの状況です。眼鏡は曇り、視界は悪く、夏用のトレッキンググローブでは手がかじかんでしまいました。慌てて 5 本の指をストックを持ちながら動かししました。もちろん凍傷予防です。

そんな中、一步一步を確実に踏み出して標高を稼ぎながら頭の中に浮かんだのは、やはり厳冬期のハヶ岳でした(私は厳冬期のハヶ岳をホームグラウンドにしています)。

快晴のある 2 月。

ハヶ岳の主峰＝赤岳の稜線に辿りついた時、一瞬でしたが突風で身体が数センチ浮きました。赤岳のピークまであと高低差で 200m 位の稜線でした。眼鏡をしていても目が開けられないほどの風。ヘルメットに付けていたゴーグルを直ぐさま眼鏡の上から装着。休んでいる暇もなく、ピークへと一歩を踏み出しました。途中、耐風姿勢を何度も何度も繰り返し取りながらピークへと向かいます。誰も登っていない稜線でピッケルのピックとアイゼンの 12 本の歯を駆使しながらやっとの思いで登り切ると、『赤岳』と刻まれた頂上標識には俗に言う「エビの尻尾」(空気中の水蒸気が岩や木切れに着氷しそれが成長したもの)が 20cm は横向きに張り出していました。辺りは雲ひとつない真青な空と雪と岩。大きな感動



夏山なのにみごとに岩に付着した雪の塊

だけだと思いましたが、どういう訳かそれと同じくらいの恐怖心もありました。冬山の素晴らしさは感動と恐怖が並列しているところにあると個人的には思っております。

そんな記憶を辿り、風と格闘しながら歩いていると、少々平になった広場に気象観測用だと思いますが、小さな小屋が目の前に現れました。2030m ポイントです。時計を見ると最後に休憩をとってから 2 時間が過ぎていました。そこでは、先行していたパーティーが休憩をとっていました。ガイドさんが休憩をしようと提案。突風の中なんとかタバコに火を付けてゆっくりと煙を吸い込みました。

「追いつきましたね」とガイドさんが小声で私に言いました。「かなりゆっくりペースでしたけど…、休憩の数が少ないからじゃないでしょうか？」

「SHIRAI San、とても強いですよ」

「そんなことないですよ」と笑顔でガイドさんに返しました。

「これから先は雪上歩行です」

「そのようですね。頑張ります」

その時、休憩していたグループのガイドさんが近づいてきて「KON-NICHI-WA ! NIPPON-JIN DESUKA ? 」と日本語で訊いてきました(憧れていた果てしなくゴツいロシア人山岳ガイドさんでした)。

「SOU DESU NIPPON-JIN DESU」

「ANATA-WA HAYAI DESU ! GAMBA-GAMBA ! 」

突風にも負けない最高の笑顔でガイドさんは言いました。

「ARIGATOU WATASHI GAMBA-GAMBA ! 」

と私も笑顔で応えました。彼はにっこり微笑み、自分のパーティーへと戻っていきました。

どこの国の人もそうですが、どんなに辛くても山に登る人は皆さん同じように笑うのでしょうか。童心に帰っているからでしょうか。それとも自然の中にいるからでしょうか。本当に不思議です。

休憩をとっているロシア人グループ全員が立ち上がり、出発していきました。

「もう少し休憩しましょう」と私のガイドさん。

「了解。ではタバコをもう一本」

それにしても休んでいると体感温度がどんどん下がるのが分かります。困ったものです。

休憩終了後、いよいよ雪上歩行へと移ります。ガイドさんと私はガスの中見え隠れするロシア人グループの後を追うように歩き始めました。

雪の感触は非常に悪く、突風により表面の雪は凍結し(エビの尻尾が数センチ成長しているくらい)、その表面に足を乗せると氷は砕け 15cm ほど雪に埋もれるという感じです。ストックのスノーバケットも同様です。氷の抵抗を受けた後、深く潜り込んで行きます。この状態をラッセル歩行するのは結構な作業です。私たちの前のロシア人グループに感謝しながら歩き続けました(反面、ラッセル泥棒という表現もあります)。しかし、標高を稼げば雪面の状態はさらに悪くなることが予想されます。



ルートは雪面下にあるので目視できません。頂上に向けて直登するだけです。

顔を上げると先行していたグループが徐々に隊列を乱しているのが分かります。元気のある人は直登。体力を温存する人はジグザグに歩いています。そして勾配がさらに上がっているのが分かります。10 分位直登すると先行グループに追いつきました。それぞれに声をかけながらひたすら登ります。山では国籍は関係なく皆がみんな声をかけ合います。先ほどの日本語で話しかけてきたガイドさんも追い越しました。日本の冬山で鍛えてきたキックステップでゆっくりとゆっ

くりと確実に雪面にブーツを蹴り込みます。私のガイドさんも 10m 位先をゆっくりと登っています。

「それにしても、こんな凍結している雪面をアイゼン無しで…登りは良いが、どうやって下ろのだろう…」。少々と言うよりもかなり不安に思いながら登り続けました。

休憩も随分ととっておりません。ガイドさんをよそに 20 秒位の立ち休憩をし、先ほど抜かしたロシア人グループを見下ろすと目測で 50m は差が付いているのでしょうか。一方で頂上方面を見てみるとさらに先行していたと思われる 5 人くらいのパーティーが 100m 位先でしょうか。割と近くに見えております。

「ん？ガスが切れてきた？」

気が付けば突風がかなり弱まっています。上空を見ると、なんと！！つい 30 分も前の天候とうって変わって青空がところどころに見え始めています。

なんということでしょう！どんどんガスが抜けて行くじゃありませんか！先行しているガイドさんも私の方を振り向き「頑張っているから、晴れました！」と上空を指さしながら大きな声で叫んでいます。

ここで一気に疲労感から解放されました。ガイドさんが登らずに待ってくれていたのも、私は再度歩行を始め近づきます。「まだ頂上じゃないけど」とグローブから右手を出し私に向けました。「あともう少し頑張りましょう」と私もグローブから右手を出し、ガイドさんと強く握手しました。

「ここで立ち休憩しましょう」

「了解」

辺りを改めて見渡すと、反対側にあるカリヤーク火山には雲はかかっておりません。頂上から麓まで山の全貌が見え、上空もどんどんと青空が広がってきています。

久しぶりに携帯を取り出し(と言うよりも登山が始まってから初めて写真を撮る余裕が出てきました)、その美しい景色を画像に収めました。

風も弱まり、ガスは消え、青空と凍った雪面。雪山登山の醍醐味です！残り高低差にして 200m 位でしょうか、今回、カムチャツカに来て初めて良かったと本当に思いました。そして、あともう少し登れば…頂上付近がもう目の前に見えております。もうすぐ登頂です。

ガイドさんとは言葉もなく自然に二人とも頂上に向かい歩き始めました。それでもストックは確実に雪面を突きキックステップを慎重に蹴り込み歩き続けると、急登だったルートはずいぶとなだらかになりました。

数秒の立ち休憩を交えてピークを見ると、先を行くガイドさんがこちらに向かって手を振っています。後 15m 位です。その先には既に登頂している数名のグループが皆で握手をしているのが見えます。その足元には雪がありません。

「辛かった。本当に辛かった。でも良く頑張った」私は残りの数メートルを自分に声を出しながら励ましました。ほとんど半泣き状態でした。

やってしまいました。

12 時 23 分。アヴァチャ山を登頂してしまいました。

休憩を含めて約 5 時間半。

「登頂しましたね！」

「一言。本当に大変でした」

「今も？」

「今は全く！むしろ身体が軽い！」

「ですね」

「すみません。登頂直後の私の写真をとってもらえます？」

ザックを下して携帯をガイドさんに手渡しました。

撮ってもらった画像を直ぐに確認すると。

これまたスゴイ！！泣き
そうな顔です！『辛かった。
良く頑張った！』自分に
言いました。



登頂直後、泣きそうな笑顔

ガイドさんが「ここに座って
みてください」といいまし
た。

言われるままに腰を下ろ
すと、驚きました。なんて温
かいのでしょうか！

「活火山ですから、地熱が伝
わり温かいんです。ここは雪も積りませんよ。直ぐに溶けま
すから」

「すごいですね。そして本当に温かい」

お尻から伝わる熱でそれまで冷え切っていた身体がどん
どん温まるのが分かります。

「カムチャツカは生きているんです」

誰もいなかったら頼ずりするところでしたが、『グッ』と堪え
たのは言うまでもありません。

そうこうしているうちに、先ほど抜かしたロシア人グループ
が、日本語であいさつしてくれたガイド山とともに続々と登頂
してきます。ガイドさんは別として、他の登山者は疲れ切っ
た表情の中でも充実感に溢れているのがよく分かります。み
んが良く頑張ったんです！

先に登頂して同じように山頂に座っていた女性 2 名が突
然ロシア国歌を歌い始めました。それに合わせて登頂した
皆が大合唱。

『この国の人達は国歌を歌うんだ。すごい！そして羨まし
い』心の中でひっそりと思いました。

私を連れて来てくれたガイドさんはただただ微笑んでおり
ました。

「身体も温まったし、そろそろ頂上散策にでかけましょう」
「了解」

ザックとストックは放置してスタート。頂上の景色はという
…雪の無い数メートルのくぼ地を挟み真っ平らな雪面がど



こまでも続いて
おりました。
ガイドさん曰
く、どこからガ
スが噴出して
いるか分から
ないので広く
平らな頂上
はルートが無
いとのこと。し
かし、外周の
お鉢廻りまで
とは言えませ
んが半周は
できるようで
す。ただ、硫
黄の有毒ガス
がところどころ

登頂！頂上には雪がない！

で噴出している
ので相当な気合
いを込めなければ
なりません。

とりあえず歩いてみることにしました。アヴァチャ山のお鉢
を 5 分位進んでみると…もうありました。有毒ガスの噴出口
(日本の山でイメージしやすいのは、北アルプスの焼岳頂
上直下にあるガス噴出口です)。もちろん、アヴァチャ山で
は防護柵や危険を示す標識などありません。そして、ガイド
さんに導かれるまま近づいて噴出口を覗いてみました。感想
はというと…ただ「黄色い」でした(正直焼岳のそれの方が
迫力ありました)。

それよりもこのお鉢めぐりコースはとんでもなく痩せたル
ート(狭いルート)で、ここでは絶対に転べません。中途半端に
雪が付着し、ところどころに岩石がごろつくところは登頂途
中の凍った雪面よりも恐ろしく感じました。ガイドさんもかなり
慎重に歩いています。

ガイドさんが振り返り「先週来た時はぜんぜん問題なかつ
たのですが、これ以上、先に行くのは危険なので止めましょ
う！」と言いました。

「帰りましょう！そして、下山しましょう！」と私。

頂上の写真を数枚撮りザックを残置した場所へと慎重に
速攻で戻りました。

13 時 10 分。

ザックを拾いストックを再び構え、登頂できた他の登山者
やガイド山と別れを告げ、アヴァチャ山頂にまた来ます！と
挨拶をして下山開始。(つづく)

【イベント情報】

ロシア文化フェスティバル 2016 in JAPAN

* 今年も興味深いさまざまなプログラムが予定されています。前半のプログラム(4 月～8 月)をご紹介します。

●オープニング●

今年のオープニングは 6 月 17 日です。ナルイシキン・ロシア下院議長を迎えて、サントリーホールでの「トランスシベリア芸術祭」で幕をあけます。その翌日には、在日ロシア大使館で記念レセプションが予定されています。



トランスシベリア芸術祭 IN JAPAN 2016

”パ・ド・ドウ for Toes and Fingers”

6 月 17 日 19:00 開演 サントリーホール

出演/ワディム・レーピン(ヴァイオリン)、スヴェトラナ・ザハーロワ(バレエ)+ミハイル・ロプーヒン、ウラジーミル・ヴァルナヴァ、ドミトリ・ザグレピン、祝祭室内合奏団

オープニング記念レセプション

6 月 18 日(土)12:00 駐日ロシア大使館(予)

ボリショイサーカス

7 月 16 日(土)17:00 東京体育館

熊、猫、犬のサーカス、空中アクロバット、空中ブランコなど

モスクワ音楽院創立 150 周年・モスクワ音楽院室内合唱団

出演/ロシア音楽祭(民謡合唱団+民族楽器+民族舞踊)

7 月 23 日(土)12:00 新宿文化センター

日本全国から約 20 ロシア民謡合唱団が出演。モスクワ音楽院室内合唱団は 15:30 頃開始の第 2 部に 30 分出演予定

●ロシア文化フェスティバル 2016 プログラム●

パラジャーノフ 映画特集

4 月 16 日(土)～29 日(金・祝) 新宿KS cinema

上映作品:「火の馬」「ざくろの色」「スラム砦の伝説」「アシク・ケリ」「アンドリエーシ」「石の上の花」

<http://www.ks-cinema.com/movie/parajanoyan/>

ウラディーミル&ヴォフカ・アシュケナージ ピアノデュオ

5 月 1 日(日)15:00 開演 大阪・フェスティバルホール

5 月 10 日(火)19:00 開演 東京・サントリーホール

プログラム: グリンカ 幻想的ワルツ短調、スメタナ『モルダウ』、ラヴェル『スペイン狂詩曲』、ラフマニノフ『交響的舞曲 op.45』

お問合せ: AMATI 03-3560-3010

アレクサンドル・ラザレフ指揮日本フィルハーモニー交響楽団

5 月 8 日(日)14:00 開演 サントリーホール

13 日(金)19:00 開演 さいたまソニックシティ

14 日(土)18:00 開演 横浜みなとみらいホール

20 日(金)19:00 開演 サントリーホール

21 日(土)14:00 開演 サントリーホール

7 月 2 日(土)18:00 開演 横浜みなとみらいホール

8 日(金)19:00 開演 サントリーホール

9 日(土)16:00 開演 サントリーホール

チケット・詳細:<http://www.japanphil.or.jp/>

フィリップ・チジェフスキー指揮、アレクセイ・リュビーモ出演(ピアノ)、東京ニューシティ交響楽団コンサート

5 月 21 日(土)14:00 開演 東京芸術劇場

プログラム: プロコフィエフ『交響曲第 1 番 二長調作品 25「古典的交響曲」』、ストラヴィンスキー『ピアノと管楽器の協奏曲』など

チケット・詳細:<http://tnco.or.jp/concert/248/>

イリヤ・イーティンピアノリサイタル

6 月 4 日 18:00 開演 名古屋・宗次ホール

<http://www.munetsuguhall.com/calendar2/201606.php>

トランスシベリア芸術フェスティバル

6 月 11 日(土) 名古屋・愛知県芸術劇場

お問合せ: 中京テレビ事業 Tel:052-957-3333

6 月 15 日(水) 前橋・群馬県民会館

お問合せ: 前橋市民文化会館 Tel:027-221-4321

6 月 17 日(金) 東京・サントリーホール

6 月 18 日(土) 東京・サントリーホール

6 月 20 日(月) 札幌コンサートホール

6 月 22 日(水) 東京オペラシティコンサートホール

スラバのスノーショー日本再上陸!

7 月 15 日(金)～26 日(金)大阪・森ノ宮ピロティホール

7 月 30 日(土)～8 月 14 日(日)東京・シアター1010(センジュ)

国立モスクワ音楽院室内合唱団コンサート

7 月 19 日(火)18:30 東京・銀座プロッサム中央会館

7 月 20 日(水)18:30 横浜・神奈川県民ホール小ホール

7 月 22 日(金)18:30 栃木・小山市立文化センター

7 月 23 日(土)12:00 新宿文化センター(第 3 回ロシア音楽祭特別客演)* 合唱団の出演は 15:30 頃開始の第 2 部

ボリショイサーカス全国公演(1)

7 月 16 日(土)～24 日(日)

10:30/14:00/17:00(3 回公演)東京体育館(最終日は午前・昼 2 回公演)

7 月 29 日(金)～8 月 1 日(月)札幌・真駒内セキスイハイムアイスアリーナ

8 月 5 日(金)～8 日(月)長野・長野市ビッグハット

8 月 11 日(木)～15 日(月)千葉・幕張メッセ・イベントホール

8 月 18 日(木)～22 日(月)所沢・所沢市民会館



8 月 25 日(木)～29 日(月)名古屋・愛知県体育館

ボリショイサーカス全国公演(2)

7 月 16 日(土)～18 日(月・祝)長岡・アオーレ長岡

7 月 21 日(木)～24 日(日)京都・島津アリーナ京都

7 月 27 日(水)～8 月 7 日(日)横浜・横浜文化会館

8 月 11 日(木)～14 日(日)福岡・福岡国際センター

8 月 18 日(木)～21 日(日)高知・春野体育館

8 月 25 日(木)～28 日(日)大阪・エディオンアリーナ大阪

<http://www.bolschoicircus.com/schedule/index2.html>

* このほか、ワガノワ・バレエアカデミー教師による特別レッスン、ロシア語スピーチコンテスト、留学セミナー・相談会、プリアート共和国「ナルガム」コンサート、国立モスクワクラシックバレエ、クリスマス・コンサートなど、盛り沢山のプログラムが準備されています。

日口交流協会**第 30 回マトリョーシカ絵付け教室**

日 時: 5 月 22 日(日) 午前 9:30～11:30

参加費: 3,000 円 講 師: エレーナ菅野さん

場 所: 港区立男女平等参画センター(田町駅)

(第 31 回は 6 月 19 日(日)13:00～15:00)

☎ 日口交流協会 TEL: 03-5563-0626

**日本とロシアの友好親善を進める愛知の会設立 15 周年
一般社団法人 日口友好愛知の会 設立 記念講演会**

日 時: 5 月 15 日(日)15:00～18:30(講演 15:00/懇親会 16:30)

会 場: アイリス愛知(名古屋市中区丸の内)

講演会: 「ロシアの現状とこれからの日露関係」

エヴゲーニー・アフナシエフ駐日ロシア大使

参加費: 6000 円(講演会のみ 1000 円)

日本とロシアの友好親善を進める愛知の会 TEL: 052-411-9906

JIC のロシア語留学相談会**5 月 21 日(土) 東京、大阪で開催します!**

場所: JIC 大阪事務所 10:00～14:00

場所: JIC 東京事務所 13:00～17:00

* 平日に時間がとれない方のために、東京と大阪でロシア留学相談会を開催します。カウンセラーのローテーション上、前日までに必ず事前予約をお願いします。

主催: JIC 国際親善交流センター

☎ 大阪: 06-6944-2341 / 東京: 03-3355-7294

e-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

◆◆編集後記◆◆

▼今号は、ロシアセミナーでの中澤英彦先生の講演録を中心に編集しました。留学にはいろいろな形がありうる。ロシアに住めば価値観が変わる。才能が開花する。…。先生の話は面白く、とても勇気が湧きました。▼話変わって、今年の 4 月 11 日でジェーアイシー旅行センター株式会社は設立 30 周年を迎えました。日本とロシアの人と人の交流を支えるため、これまでよりも一層丁寧、一層面白く、一層無鉄砲に、旅行業務に邁進したいと思います。▼桜の季節が過ぎ、いよいよ夏が近づいてきました。今年の夏もいいことがありますように! (F)

****JICのロシア語留学・研修******27 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」**

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 26 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,200 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学9月生・募集中

**締切間近です
今すぐお申し込みを!**

**期間: 2016年9月1日より10ヶ月
締切: 2016年6月15日(水)**

モスクワ国立大学 722,500 円(授業料 10 ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 705,000 円(授業料 10 ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 321,000 円(授業料 10 ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかります。

※極東連邦大学は、10 月 1 日から 10 月 31 日になります。

◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。
お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 9:30-18:00 03-3355-7294

大阪デスク 平日 9:30-16:00 06-6944-2341

※留学相談は、必ず事前に予約してお越しください